

Beyond "Draw"

The Secret of Making Modern Painting

「描く」を超える

現代絵画 制作のひみつ

小杉放菴記念日光美術館のコレクションの一つの柱として、1990年代から2000年代に制作された絵画が挙げられます。この時代の絵画は、「日本画」「洋画」の枠組みや、「描く」という行為すら超えた作品もあります。

画家たちは、どのようにしてこれらの作品を「描く」に至ったのか。本展は、「線を引く」「空間を刻む」「重ねる」「たらず」「待つ」の5つのキーワードを軸に、現代を代表する7人の画家の作品をならべることにより、彼らの制作のひみつを探るとともに、「描く」という行為の多様性に迫ります。

■ 展覧会概要

会期 2020年4月11日（土）～5月31日（日）

休館日 毎週月曜日（ただし5月4日は開館）、5月7日（木）

開館時間 9時30分～17時（入館は16時30分まで）

入館料 一般730（650）円、大学生510（460）円、高校生以下は無料

※（ ）内は20名以上の団体割引料金

※身体障害者手帳、療育手帳、精神障害者保健福祉手帳の交付を受けた方とその付き添いの方1名は無料

※第3日曜日「家庭の日」（4月19日、5月17日）は、大学生は無料

主催 公益財団法人 小杉放菴記念日光美術館、日光市、日光市教育委員会

■ 展覧会構成（作品はすべて小杉放菴記念日光美術館蔵）

1. 線を引く

「線を引く」ことは、「描く」ことの始まりであると言えます。この章では、一定のキャリアを積んだ後、「線を引く」ことに制作の原点を見出した二人の画家を紹介します。

多摩美術大学で洋画を学び、公募展に出品を重ねてきた菊地武彦（1960-）は、20代の終わりに「何を描くのか」という壁にぶつかり、その結果、紙の上に線を引くことにたどり着きます。この「線の気韻」シリーズは、水彩絵具のほかに日本画の画材である岩絵具も使われていることから、まさに「洋画」「日本画」の枠組みを超えた作品とも言えるでしょう。

一方の二木直巳（1953-）は、武蔵野美術大学で彫刻を学ぶものの、立体彫刻は自らが目指すものではないと感じ、卒業目前にして中退。以降、個展を中心に平面作品を発表します。30代の半ば頃から、ワトソン紙に色鉛筆でひたすら線を引いて重ねる「見晴らし台」シリーズを手がけるようになります。極めて理知的に見えるこれらの作品ですが、時折フリーハンドの線も現われ、感覚的な印象も見る者に与えます。

長さ、太さ、色、そして画材によって変化する線の表情をご覧ください。

作品 1



作品 2



作品 3



作品 1	菊地武彦	線の気韻 1993-9	1993 年
作品 2	菊地武彦	土の記憶 2006-36	2006 年
作品 3	二木直巳	見晴らし台 1307	2013 年

II . 空間を刻む

青空とその下に広がる風景を描く洋画家・入江 観 (1935-)。澄み渡る空を滑らかな筆致で描きますが、20 代後半までは敬愛するセザンヌを彷彿とさせる大きな筆触分割を用いて描いていました。

しかし、29 歳のとき、留学先のフランスから帰国した彼は、フランスと日本の風景の違いに悩み、思うように制作ができなくなります。そのような中、32 歳のときに勤務先の女子美術短期大学がある茅ヶ崎に転居し、後の画業で重要なモチーフとなる海辺の風景と出会ったこと、そしてセザンヌの影響から脱した滑らかなマチエールを手にしたことにより、自らの画風を確立するのです

入江は調子が良いとき、「空がデコボコに見える」と度々述べています。確かに滑らかな筆致で描いてはいるものの、目を凝らすと様々な色を用いていることが分かります。それは画家が言うように、「空間を刻む」意識で描いたとも考えられるのです。

この清澄な空はいかにして描かれたのかを、画風の変遷をたどりながら探ります。



作品 4

入江 観 湖上凱風 1992 年

III. 重ねる

緑とグレーの色のかたまりのようなものを上下に配した油彩画《背にとどまるもの 04.8-1》。この作品を描いた佐川晃司（1955-）は東京藝術大学在学中、講師であった「もの派」の中心的人物・榎倉康二（1942-1995）の影響を受け、一時期は映像などを制作したものの、最終的に「絵画」に自らの進む道を見出します。

佐川は、色そのものが持つ「力」を描き続ける画家であると言えます。青年時代は平面的な作品を描くことにより色を表現していましたが、49歳の作品《背にとどまるもの 04.8-1》は、色をひたすら「重ねる」ことにより、立体感や重量感を表わしているようにも見えます。

画家は何故、ひたすら「色」を塗り重ねたのか、そして何を表わそうとしたのかを探ります。



作品 5
佐川 晃 司 背にとどまるもの 04.8-1
2004 年

IV. たらす

「描く」とは、筆を画面に接触させることに止まりません。筆などに絵具を含ませて、それをたらすことによって「描く」2人の画家がいます。

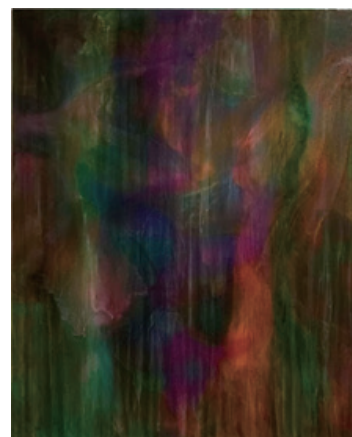
東京藝術大学で日本画を学んだ間島秀徳（1960-）は、制作に水を用いることで知られています。近年彼が手がける「Kinesis」シリーズは、アクリル絵具で塗りつぶした麻紙に水を撒き、そこに胡粉や岩絵具のほか、河原の砂などを筆に含ませて、たらし、さらに画面を傾けることによって描かれます。空とも波濤とも見える《Kinesis No.407 (Bakufu Un)》ですが、年代や国籍を問わず、あらゆる人々の心を動かす絵画を描こうとする画家の意志をこの作品から読み取ることができます。

もう一人は、中村 功（1948-）です。武蔵野美術大学卒業後、版画や立体を制作していましたが、後に平面の制作へと移行します。筆ではなく、スプーンで溶いた絵の具をたらして制作するのが特徴です。まるで自動車のボディのように照り輝く《Surface / Figaro 意勢IV -30》からは、絵画を「人工物」と位置づける画家の考えをうかがい知ることができます。

「自然」と向き合う間島と、絵画を「人工物」と位置づける中村。正反対とも言える2人の画家の「たらす」ことによって描かれた作品をご覧ください。



作品 6
間島秀徳 Kinesis No.407 (Bakufu Un) 2009 年



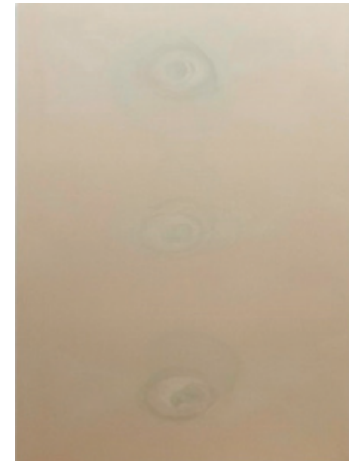
作品 7
中村 功
Surface /
Figaro
意勢IV -30
2005 年

V. 待つ

「描く」ことは絵筆を持つことに限りません。大学で日本画を学んだ山田昌宏（1960-）は、制作における「恣意性」に疑問を抱くようになり、38歳頃に筆を持つことを放棄します。

模索した結果、彼は木枠にゆるく張ったカンヴァスに、噴霧器で絵具をたっぷりと撒き、それを乾燥させることによって「描く」という方法にたどり着きます。一見、何もしていないように思われますが、山田は絵具が乾く様子を見つめ、ひたすら「待つ」のです。また、湿度や温度によってカンヴァスの弛みや縮みが変化するため、どのような作品ができるのか画家は全く予想がつかないとも言います。

「待つ」こと、言い換えれば時間の積み重ねと偶然性によって生まれた、《ティリニ》をご覧ください。



作品 8

山田昌宏 ティリニ 2006年

■ 会期中のイベント

出品作家によるクロストーク

日時：5月10日（日）14時～

会場：当館エントランスホール

講師：入江 観氏（洋画家・女子美術大学名誉教授）

菊地武彦氏（画家・多摩美術大学教授）

聞き手：清水友美（当館学芸員）

■ 広報用画像

本リリース掲載の作品図版を、本展広報用画像としてご提供いたします。図版に付した1～8が図版番号です。ご希望の場合は、展覧会担当までメールにてお申し込みください。その際、会社名／雑誌等名／ご担当者名／連絡先／希望画像データの番号を明記してください。

担当学芸員によるギャラリートーク

4月18日（土）、5月16日（土）

各日11時～／14時～

■ 次回展予告

日光へようこそ Welcome to NIKKO

7月18日（土）～8月30日（日）

※6月1日～7月17日（金）は空調改修工事等および展示替のため、全館休館いたします。（会期等は変更になる可能性があります）

■ 本展に関するお問い合わせ先

小杉放菴記念日光美術館

〒321-1431 栃木県日光市山内 2388-3

Tel: 0288-50-1200 Fax: 0288-50-1201 HP: www.khmoan.jp

担当学芸員 清水友美

E-mail: shimizu-tomomi@khmoan.jp